

浜本 純逸

はじめに

国語科教育の課題は、日常生活の中で使われている生活言語を鍛えて豊かにしていくことにあると考えています。そのように考える立場から、私は地域の国語科教育の遺産と地域の言葉とを大事にしたいと思っています。

地域の国語科教育に関しては各県別国語科教育史の研究が進めばいいなと思い、『福岡県国語教育史』(溪水社)をまとめたことがあります。当地の福島県に関しては、敗戦直後の生活綴り方の伝統の中から「調べる綴り方」が生まれた経過を報告された高野保夫先生のご研究に、私は多くのことを学んでいます。本日も先ほどの小・中・高の校種を超えて連携しようとされているご発表に福島県を感じ、私には、新たな学びでした。

地域の言葉として、方言の力を見直し、大事に受け継ぎ育てていくことが日本語を豊かにしていくことの一助になると考えています。そのための実践として、私は、「国語科教育法」の時間に「単元方言詩を作ろう」を実践し、それを先行事例として各地の大学の先生方に依頼して「大学生が方言詩を書く」学習指導をしていただきました。福島大学では高野保夫先生に依頼しました。次に学生が作った「福島の方言詩」を紹介します。

じんちゃへ

石井路子

そっちの暮らしはどうだよ
もう体こわぐねえかよ
うめえ酒いっぺえ飲んでつかよ
こっちはな
じんちゃがいねぐなってから。
しげねぐってしょうがないよ
何だべななあ どうしようもねぐ
しげねくなっちまったよ。
おめならさすけねえって
笑ってもらいてえなあ

向こうへ行ってしまったおじいちゃんに語りかけるこの詩は、読むたびにほろりとする。おじいさんへの深い思いが伝わってくる。「こわぐねえかよ」・「しげねぐって」・「さすけねえ」という生活に根ざした言葉が悲しみを深くする。方言の「深さ」を感じさせる詩である。

私の言語感覚

井上夏美

ある日先生が言った
「学校へ行く」
「学校に行く」
「違いは何だろう?」
「国語学のゼミの人はわかるでしょ?」
視線が一点に集まる
私のことか・・・・

そんなことわたしにきかないで
だって私、「へ」も「に」もつかわない
どっちも間違いでねえのか?
私は「学校さ行く」だ
考えすぎたら、病気さなっちまう
だから「わがんねえ」

*浜本編『現代若者方言詩集』(二〇〇五 大修館)

学校文法って何だろう、と思わせられる。学校が、いかに生活から遊離した言葉を教えているか、ということユーモラスに教えてくれる。共通語の女子の用法を「どっちも間違いでねえのか?」と切り捨てるあたりは、「笑い」とともに流せない痛烈な抗議の声がこもっている。このような痛切な抗議を軟らかく表現できて読み手に共感を誘うところに方言の豊かさとしなやかさがある。

さて、このように、生活語を鍛え・豊かにしていくという立場に立って、国語科学力とは何かという問題を中心に、学力低下論をどのように受け止めていくか、その受け止め方が学力低下論に

応える道になるであろうという見通しのもとに、大きく四つの柱でお話し申し上げていきます。 |

一 読解力と読解リテラシー

二〇〇四年の十二月に「日本の子どもの読解力が低下している」と報道されて以来、「学力低下」ということが世間で話題になっています。OECD(経済協力開発機構)は各国の義務教育修了者(日本の場合、高校一年生、五月)の学力を調べようということで PISA (Program for International Student Assessment)調査をおこなってきました。その二〇〇四年調査で「日本の読解力は8位から14位に落ちた」と報道されたのが直接のきっかけです。「順位が落ちたから、日本の国語教育はもっと読解力の指導に力を入れなければならない」と言っているのですが、問題文をよく見ると単なる読解力ではなく「読解リテラシー (Reading Literacy)」の程度を調べているのです。私は、単純に従来の読解力指導を強化するだけでは次の PISA 調査においていっそう得点が低下するであろう、と考えています。

どのように違うかということを考えるために、新聞にあげられている問題を一問紹介します。読んでみますと、二つの対立する意見を提出して、それに対する読み手の意見を述べさせる問題です。公益性・公共性を重視するか、個人の利益あるいは個人の自由を肯定するかという永遠の課題を問いかけています。

設問は、「あなたは、この2通の手紙のどちらに賛成しますか。片方、あるいは両方の手紙の内容に触れながら、自分なりの言葉を使ってあなたの答えを説明してください」となっています。これは、「片方あるいは両方の手紙の内容に触れながら」という辺りまでが、従来の日本の「読解」に相当すると思います。つまり内容の理解で、「ヘルガさんはこうこういう理由でこう言っている、ソフィアさんはこうこう言っている」というようなことを、要約させて理解力を測る方法です。その上でさらに「自分なりの言葉を使ってあなたの答えを説明してください」という問いがついています。これは普通の公のテストでは、「自分なりの」というのは個性だから評価できない、だから試験に出さない、とわたしたちが避けていたところを、「自分なりの言葉で」ということを表に出

して、意見を表明させています。つまり、表現力をも「読解リテラシー」の要素として考えているのです。

これに対して、従来の日本式の読解指導を強化して「それは何を指しますか」、「ここの人物の気持ちはどんなのでしょうか。」という言い換える形での理解を求める読解指導をするならば、ますます点が開くだろうと思われれます。

実は、「この二人の子がどういうことを言っているか」というような、要旨を尋ねるレベルの問題では、点が高かったのです。ところが、自分の意見を述べさせる設問では得点が低かったのです。他の問題でもいくつかある設問の中には必ず意見を表現させる設問を入れています。「あなたはどう思います」とか、「この宣伝の仕方はこれでいいですか」とかいう形で意見を求めています。日本の生徒の点が下がっているのは、その意見を書くところで書かない子が多かったためです。つまり、五点なり六点なりが0点になるわけですね。表現力の弱さが平均点を下げています。

問題例(2000 年出題分、一部略)

落書き

学校の壁の落書きに頭に来ています。落書きを消して塗り直すのは今度が4度目だからです。創造力という意味では見上げたものだけれど、社会に余分な損失を負担させないで自分を表現する方法を探すべきです。

建物やフェンス、公園のベンチはそれ自体がすでに芸術作品です。落書きでそうした建築物を台無しにするのは悲しいことです。消されてしまうのに、この犯罪的な芸術家たちはなぜ落書きをして困らせるのか私は理解できません。 ヘルガ

十人十色。人の好みなんて様々です。世の中はコミュニケーションと広告であふれています。企業のロゴ、こういうのは許されるでしょうか。許せるといふ人もいれば、許せないという人もいます。

看板を立てた人はあなたに許可を求めましたか。求めています。それでは落書きをする人は許可を求めなければいけませんか。

しま模様やチェックの柄の洋服はどうでしょう。

そうした洋服の模様や色は、花模様が描かれたコンクリートの壁をそっくりまねたものです。そうした模様や色は受け入れられ、落書きが不愉快と見なされているなんて笑ってしまいます。芸術多難の時代です。 ソフィア

問 あなたはこの2通の手紙のどちらに賛成しますか。

片方あるいは両方の手紙の内容に触れながら、自分なりの言葉を使ってあなたの答を説明してください。

(注) 03 年の問題は次回も使うため公表されていない

単なる読み取ることだけではなくて読み取ったことに対して自分の意見を作ることが、これからの国際化社会・情報化社会における「読解リテラシー」として求められているのです。したがって、これからは「読解力」という言い方でなくて、新しい意味を込めて「読解リテラシー」という概念用語(ビジュアルリテラシーというようなこともいわれるように、映像や図像、そのようなものを含めて)でリテラシーの力を育てていきたいと思っています。

そして、リテラシーの中には、「クリティカル・シンキング」(批判的思考)が含まれています。子供たちに自分の立場を持って批判的に思考をさせていき、そして考えを表現させる、ここにこれからの国際的な社会に生きる人間に求められている学力があります。批判的思考をするには自分で判断の基準を持たないと思考ができません。公共性を重視するのか、個性発揮のほうを重視するのか、わたしはこちらの立場を取る、この立場からはこう言えるというように、4歳なり5歳なりの自分の判断基準を持たないと批判できないわけです。

その年齢に応じて自分なりの判断を、その状況における判断力を、判断の基準を持つことを私たちも子どもたちも求められています。批判的思考のできる人間を育てることが日本の教育には求められているのではないのでしょうか。

二 表現力を育てる

話す力、書く力、つまり表現力の育成にもっと力を注ぎたい、と私は考えています。ここに持ってきたのは、石川県の今年の公立高等学校の問題です(プロジェクター映像)。「美しい日本語とは、どのような言葉か」について文化庁が調査した結果をグラフで表したものです。「思いやりのある言葉 何%」、「ふるさとの言葉 何%」とグラフに示されています。問いは、「これを使って、二〇〇字程度で意見を書くこと」とあります。作文は公平な評価がしにくいので出題が敬遠されがちですが、評価しにくいことを承知で石川県は作文問題を出しています。このような作文問題は新しい時代に対応しようとしている、という印象を受けました。

私は早稲田に行って今年で三年目ですけれども、昨年末に「レポートの書き方」というテーマで講義をやってもらいたい。多くの先生が近頃の大学生はレポートもろくに書けない、と言われるので。という話があり、引き受けました。「そんなハウ・トゥーで学生が来るだろうか」と半信半疑でしたが、開講してみると学生は定員いっぱいの二十人が来ていました。

最初の時間に一人ずつ自己紹介させましたら、「アメリカで僕は、レポートの書き方という授業を三年間受けました」という学生がいましたので、その次の週に「アメリカで受けたレポート学習」という報告(口頭レポート)をさせました。その時、彼は次のレジュメを配って話しました。

アメリカで受けた作文教育

F.K

レポートの書き方を教えることは、教育の中で重要である。アメリカの高校では、ほぼすべての科目においてレポートを書かされる。成績の大半がレポートの出来具合で左右されるといっても過言ではない。しかし、いきなりレポートを書けと言われてパーフェクトなレポートを書ける生徒は、そうはいない。そこで重要視されてくるのが、レポートの書き方である。

中学生の時点からレポート教育は始まる。基本的なことをそこで教わり、練習程度に書かされる。高校に入ると、本格的にたたき込まれる。主に、

英語の授業でそれを指導され、レポートの基本的な構築方法からより説得力のある長い研究論文の書き方までを教わる。英語(国語)の授業では決まったテキストというものがなく、先生によって、クラスでの指導方法も様々である。唯一決まっているのが、各学年で読む本のタイトルである。シェイクスピアの『マクベス』や、ヘミングウェイの『老人と海』などがある。大体一年間で四、五冊読まされる。ギリシャのオデッセイの翻訳を僕は読まされた。長い三〇〇ページ、四〇〇ページの本を四、五冊持たせて、そして五〇ページずつぐらいレポートさせるということをやる。そのレポートに基づいて授業をするのが、いわゆる英語(国語)の授業です。そういった本を定期的に読み進めながら、ポイントごとにテーマを決めてエッセイを書き、読み終わった後にはまとめとしてブックレポートを書かされる。

次に、エッセイを書く前には、そのときにはやはり書き方を教えなければいけないから、ブレンストーミングをする。これは、自分の頭の中のアイデアをまとめる。そして、アウトラインを作り、大まかなエッセイの流れを決める。エッセイの基本的な型として、イントロダクションパラグラフと、ボディーパラグラフと、コンクリュージョンパラグラフと分けて書く書き方がある。要は段落分けであるが、ひとつの段落に目的を持たせてくる。紹介、例または主なアイディア、そして結論、と分けられる。また各段階では、先生が厳しくチェックを入れ、間違いを指摘してくれつまずいている生徒には指導を与える。

英語以外の授業では、英語で学んだことを応用してレポートを書くことを要求される。物理や化学の授業では、実験を基にレポートを書かされ、歴史の授業では何か自分がリサーチしたことを、そして数学でも、ある一つの定義を自分なりにまとめ、レポートに仕上げるということをさせられる。

高校で学んだことは後々多大に活用される。なぜなら、アメリカの大学では、レポートがすべてだからだ。要は高校では大学への準備をしているのである。大学ではレポートも書き方は、そういう趣旨のクラスを取らないかぎり教えてくれない。そして、とてつもない量のレポートを書かされる。これらはすべて後の人生で役に立つ。社会

に出てどこかの会社に就職すれば、テスト受ける回数よりもレポートを提出する回数の方が断然多いからである。

「十五分で話すように」と要求していたのですが、このレジュメにいくらか肉付けして、きちっと十五分で話しました。私が感心したのは、このように時間内に話せることとパラグラフの作り方でした。出だしがうまいですね。訓練を受けていることが分かります。

彼の報告からは、アメリカでは多読させていることも分かります。日本でも、もっと多読させることが必要なのではないのでしょうか。

この学生のレポートは五段構成になっています。イントロダクションパラグラフ(問題提起)とボディーパラグラフが三つ。そして、コンクリュージョン(まとめと見通し)がきちんとそして必要なことのみ語られています。

最後の段落、これがいわばコンクリュージョンパラグラフで、高校で学んだ「レポートの書き方」は、後々大学に進学しても社会に出てからも多大に活用される、と述べています。レポート学習に対する彼の評価(意見)を述べているのです。

四段落めでは、社会科でも理科の実験でも歴史でも数学でも、言葉でレポートを書くことで授業が完結すると述べています。表現させるということが実は理解させることだ、という考えで一貫しており、読解と表現とが一体になって指導されていることが分かります。日本でも総合学習をここ数年間やってみて、総合学習を成功させるには学習過程の最後の段階におけるレポートにまとめる力が重要であることが認識され、各教科の学習を確かにさせるためにも国語学習が重要であると見直されてきました。各教科の授業は文章を書かせることで完結するというアメリカの考え方は、もっと注目されてもよいと思います。

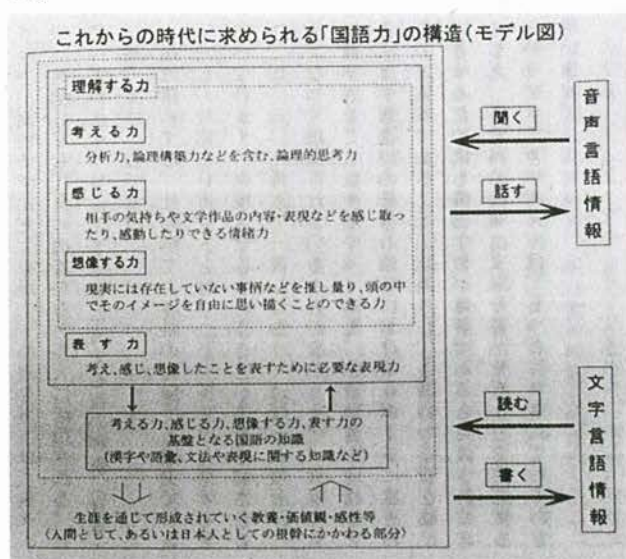
私の授業は、この後、「身近な人から職業観を聞く」という課題のもとに、職業についての文献を五冊以上読ませてフィールドワークに出しました。その報告を聞き合う頃から高まってきて、「聞き書き文集」を作って終わりました。

三 文化庁審議会答申「これからの国語力」について

今、文部科学省を中心にして、次の学習指導要領の骨格づくりを見通して二つの考え方が出されています。

一つは、平成十五年十月七日に出された『初等中等教育における当面の教育課程及び指導の充実・改善方策について』という中央教育審議会答申です。これは、新しい学力観に基づく教育を推進しようとして、「『総合的な学習の時間』の一層の充実」と「『個に応じた指導』の一層の充実」という方向を出しております。問題解決的な能力を育てるとともに学ぶ意欲の高い子どもには発展的学習を保証しようという提案です。

今一つは、平成十六年二月三日に出された『これからの時代に求められる国語力について』という文化庁審議会答申です。これからは生涯学習社会になること・国際化社会になることを見通して、その社会を形成し生き抜いていくために求められる「国語力」について左図のように提案しています。



国語力として「論理的思考力、情緒力、想像力、表現力、語彙力」を取り立てて指摘し、「読書活動の推進」を強調しています。この特色は、論理的思考力と情緒力を強調し、それを支える基盤に語彙力があるところと特色があります。国語科教育では、古典的な文化を教材化して情緒を育て、語彙指導を確かにして論理的思考力を育てよう、と言っています。

このように、新しい情報化社会に対応していく生きる力を育てていこうという中教審の考え方で、国際化社会・生涯学習社会を念頭に置いて論

理的思考力と情緒力及び語彙力を育てていこうという文化庁審議会の考え方が対立したり、交錯したりしながら議論されています。

国民がどう思うか、世論の潮流を見極めていこうとしているのが現在の状況ではないかと思えます。ここにお集まりの先生方は、「こういう国語科教育はこうあるべきだ」という意見をそれぞれに出していく時期ではないかと思えます。

四 国語科でも思考力を育てる

二一世紀に入って提起されてきた主な三つの国語学力論を取り上げて考察してきましたが、ここで気づくことはそれぞれに思考力を重視している、ということです。

PISA——生涯にわたって学び続けられる知識と技能(自己学習力)情報を取り出す力、思考力、表現力

中央教育審議会答申——問題解決的な思考力(課題発見・学習計画力・調べる力・まとめて発表する力・評価する力)

国語審議会答申——国語力(論理的思考力、情緒力、表現力、語彙力)

ここに共通して求められている能力は、思考力である。これからの国語科で育てる学力の重要な要素として「言葉で思考する力」を位置づけていくことが必要なのである。

私はこれまで、次のように学力を三層構造において捉えてきました。

基盤の学力・・・学習意欲

国語科で育てたい基礎学力

話し聞く、書く、読む—感受(言語化)、分類、名づけ(言語化)、想像、表現(発表・報告)、見る—フレーム(切り取り枠・アングル)、構成(色・形・大小・配列)、選択、比較、キャプション(言語化)、批評
全教科で育てたい学力—直観、資料収集、比較、分類、分析、選択、類推、総合、構造化、判断、批判、評価

比較・分類・選択・類推・構造化などの思考力の育成は全教科の課題であるが、言葉と深く関わ

っており、これからは国語科においてもそれらの能力を育てることを主たる課題としていきたい。それでは具体的にどう実践するか。即答はできないのですが、次のような問題を考えていきたいと思っています。

1. 「言葉で思考する力」の内容とその構造はどのように捉えたらよいか
2. 「言葉で思考する力」を育てる指導方法はどうかあるべきか
3. 「言葉で思考する力」はどのように発達するか
4. 「言葉で思考する力」の系統的指導はどうあるべきか(→カリキュラムづくり)

などです。実践と研究の課題は重く大きいと思いますが、お互いに協力し合って道を切り拓いていきたいと思っています。

おわりに

メディアが多様に変化していく時代にメディアとしての言語の教育はどうあるべきかと目標について考え続け、学習者の実態に即した教材や指導方法を見いだしていきたいと思います。言葉によって何かが分かり、何かを豊かに感じる学習経験が多くなると国語の学習が楽しくなるのではないのでしょうか。

編集部注 初出

2006年『言文』53号(福島大学国語教育文化学会)